



二足歩行を実現し、脳ミソを増大させ道具を使うことで、ヒトは食物連鎖の頂点捕食者に到達しました。他の大型肉食獣のように、ヒトもその集団が持続可能な生態系ピラミッドを構成していたと思います。ここでは縄張りと言います。長い年月の間には、縄張り内の人口が増え過ぎて、一部のヒトは縄張りの外に新天地を目指さなければならなくなり、ヒトは世界中に展開していったのでしょう。

各地に展開したヒトの縄張り内の食糧事情は不均衡で、寒冷化や乾燥化などの気候変動で絶滅の危機に瀕したこともあるのでしょう。狩猟・採集による食糧調達が厳しい地域では、生き残るための苦肉の策として穀物栽培を試行します。穀物栽培は、多くの労働時間を強いられるにもかかわらず、日照りや嵐で全てを失ってしまうこともあります。森林地帯を縄張りとして、狩猟・採集だけでなんとか生きていた集団に比べると、完全なハズレ組だったのかも知れません。血の滲むような悪戦苦闘の末、栽培技術が向上したことで、彼らが選んだ穀物は、採集で得られ

る堅果類と同等のカロリーを持つようになったのでしょう。自然(神)の恩恵から見放されたハズレ組の集団は、不作のときのリスク回避として貯蔵の技術も高めていきます。しかし、それは持てる者と持たざる者の格差を助長し、集団間に争いのタネをも育ててしまうとは見通せなかったのかもしれない。

二次的農耕地帯である列島では、自然(神)の恩恵が大きくて農耕への移行が飛び抜けて遅れます。弥生時代になって大陸・半島からハズレ組の末裔たちが渡来してこなければ、今でも縄文人が暮らしていたのかも知れません。

縄文時代中期にかけて温暖化が進み、広葉樹林が広がったことで人口はピークを迎えますが、後期になって寒冷化したとき、列島の西では縄文人が生きていくには厳しくなりました。列島における人口の東西の差は分からないことが多いのですが、レジメにあるように西日本に分布していた照葉樹のカシやシイの実よりも、東日本に分布していた落葉樹のブナやナラの実の方がカロリーが高かったのが理由の一つとも言われています。

最近の環境工学や地質学といった分野からは、「縄文社会は“火山灰”に腐食植物を含んだ黒土(黒ボク土壌)に立地する傾向を持っており、黒ボク土は微粒炭を高密度に含んでいて、その微粒炭は人為的な野焼きや山焼きが継続的に繰り返されたことによって作られている。」ことが指摘されています。火山灰が縄文人口に影響を与えていたとも考えられるようです。

かつて山内清男氏は、東日本の縄文文化が栄えたのは、サケが豊富に取れたために人口が増え、豊かな狩猟採集文化が開花したとするサケ・マス論を提唱しました。しかし、遺跡からサケ科魚類の遺存体がほとんど出土しなかったため批判にさらされてしまったようです。しかし、サケの骨は軟骨なので残りにくいことや、「鮭に捨てるトコなし」と言われるほど皮まで食べられたり、靴や服に加工していたりすることで出土しないとの見解もあります。

山形県の小山崎遺跡などでは、山間部の竪穴住居の炉の土を篩うとサケの歯が出てくることが報告されています。火で焼けることで変質し残り易くなっているらしいです。アイヌはサケの歯や骨を炉に投げ入れて火とともにあの世に送る風習を持っていますが、似たような儀礼をしていたのかも知れません。

縄文以前は陸続きだったため日本海側にサケが遡上したのは縄文時代になってからだそうです。サケは冷水を好むため後期の寒冷化したときに遡上する河川が南下しているようです。さらに、取ったサケの長期保存にとって寒冷化は好都合でもあります。サケ・マス論はもっと検討すべきではないでしょうか。

東北日本では、後期以降の寒冷化により植物食糧の採集は厳しくなりましたが、火山灰が黒ぼく土壌化したことで栽培も安定し、サケの遡上量が増加したことで、採集の減少を相殺し、西日本より恵まれていた可能性もあります。たくさんの火焰型土器を出土する信濃川沿いの縄文人は、来たるべき遡上の季節の豊漁を祈念して、舞い上がる水しぶきの中に多数のサケが飛び跳ねる光景を、彼らの土器に表現していた気がしてきました。長野・岐阜・山梨を中部と定義した地域の人口が、後期以降に激減しています。その要因は分かりませんが、中部で生まれ、育った友人としては、ご先祖様たちが東北に比べて“絆”を大切にしなかったとは信じたくないようです。

